

## 巻 頭 言

現在の先端社会研究所の研究目標は「文化的多様性を尊重する社会の構築をめざした、社会調査を基軸とする先端的な学術研究」である。

この研究所がはじまった10年前には「文化的多様性」は人類共通の願いとしてあったかに思えた。そして、世界的にもその立場で多数の研究が深化してきた。自文化中心主義から脱却して、世界の諸文化を相対的にとらえ、同等の価値で共存していこうとする方向は、人類に共通の目標であるかのように思われた。

だが、わずか10年間でこの幻想は無残にもほろんだ。「平成最後の」という言葉が決まり文句のようにテレビから流されているとき、SDGsが国際的な目標としてかけられるようになった一方で、世界の各地で移民をめぐる、民族間の衝突が起り、社会階層の分裂は深刻化している。限られた富をめぐる、その平等な分配には程遠い現実があらわになり、一方がそれを独占しようとするれば、もう一方はそれを奪い返そうとする。世界の各地で、我国の周辺も含め、いつ火がふいても、血が流されても不思議ではない危険な状況にある。

こうして、残念ながら、現実の世界では、他民族排斥を叫ぶ声高な主張が、中央集権的な国家だけでなく、民主主義を標榜する欧米の指導者からも唱えられ、しばしば民衆がそれを歓迎し、炎上している。次の時代には、民族間の対立から、先例のない破滅的技術による戦争が起こるかもしれないという不安を多くの人が抱いている。

このような時代にあって、研究の基盤自体も揺らいでいる。国家の財政状態が深刻化するにつれ、基礎的な研究に予算が割り振りあてられなくなる残念な状況が常態化した。基礎的な融合分野を、大学の附置研究所として維持していくことはそれだけでも困難なことになってしまっている。

だが、私たちはそれを保守するだけでなく、そこからもう一つの道を切り開いていかなければならない。

研究は自由であるべきだが、それは社会に無関係であっていいということではない。学問の純粋性をもとめるあまり、研究者は研究が社会に応用されることを嫌いがちだ。だが、学問もまた社会に埋め込まれている以上、社会から切り離れて純粋な学問が存在するというのも幻想にすぎない。基礎的な研究を何らかの形で社会に還元しようとする不断の努力が必要だ。

「役に立たない研究は意味がない」と言われる時、「役に立つ」ことが何を意味するのかはもう一度考えたい。すぐに技術化、製品化できる研究が役に立つとし、大学のすべての研究がそちらに向かってしまうなら、それは社会の方向が変われば、たちまち「役に立たない」研究になるであろう。

そうではなく、もっと根源的な「役に立つ」研究はあるはずだ。研究である以上、10年先、20年先の世界に「役に立つ」ことを根底的に追究していきたい。この10年間の先端社会研究所の研究はそうあったのだろうか。それを私たちは自らに厳しく問わなければいけないと思う。

私たちは、研究活動をNPOや地域と共有することで努力してきたつもりではあるが、まだ道

半ばだ。基礎研究と社会活用の間で葛藤はあるが、その葛藤の中でもがきながら、今後の大学の研究のあり方を開拓する「先端的」な研究を、次の10年に向かって模索していきたい。

2019年3月

関西学院大学先端社会研究所

所 長 奥 野 卓 司